

編集室から

ようやく、酷暑も峠を越えたようです。いつもになく、厳しい夏だったためか、いささか早い秋の気配に感じています。

ただ、今年は気温が高くなるのが早かったため、晩春や初夏がほとんど無く、酷暑が異常に長かった年でした。そんな夏を経て過ごしやすくなってくると、バテていた身体もほっとするのか、急に疲労の蓄積を実感し始めています。

一方で、各地へのお出張予定が立て込みはじめてもいますので、体調管理に神経を使います。ところが、休み休み働いていると、思うように捗らず、それもストレスに感じます。

心身ともに休ませるためには、数日間、何もしない日を作らねばなりません。なかなかどうしてそうは問屋が卸してはくれません。思いがけない頼まれ仕事も細々とあり、元来断れない性格も重なって、休むはずの予定が仕事で埋まってしまう。ですが、これは本当は有り難いことでもあるはずなので、やはり断ることができずにいます。

そんな暮らしの中で、ふと思い立ちプランクを始めました。フリーのアプリで毎朝定時に通知され、わずか1分未満の間ですが、同じ姿勢を保つ運動です。出張などで抜ける日もあるものの、概ね順調で既に120日を越えました。最初の頃は、一回あたり20秒でも、大変でしたが、今では50秒間、難なく持っています。一日でも空くと、次の日相応に堪えます。

おかげさまで体幹が鍛えられているのか、富山湾SUPでも多少の波なら、耐えて立ち続けられるようになりましたし、気がつく方には痩せたように感じられるようです。まだ、目視でわかるほどではありませんが、こころなしか腹筋もついてきているようです。普段、全くといってよいほど運動をしないので、これだけは続けていきたいものです。(は)



このニュースは、地域計画に携わる若手の技術者の参考となることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2025/10

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2025/10

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

神意月



名物 小松うどん
石川県小松市にて
by hama

**復興するぞ！
能登・北陸**

一回あきました。スティグマの話に戻ります。スティグマとは「負の烙印」という意味で、十把一絡げのレッテルを貼られることで深く傷つく人がいます。前回はⅡ型糖尿病とインスリン注射を取り上げましたが、今回はタバコを考えてみたいと思います。

◎

タバコを吸って良くないことは、今や誰でも知っています。タバコの健康被害が疑われ始めたのは一九五〇年頃からで、一九八〇年代に入ると発がん性が疑いようのない事実として証明されました。さらに動脈硬化を悪化させ、脳卒中や心疾患の原因となることも明らかになりました。そして流れが決定的になったのは、喫煙する本人だけでなく周囲の人にも悪影響を及ぼす受動喫煙の問題が示されてからです。喫煙可能な場所が制限されてタバコの値段も上がるのは良いのですが、タバコを吸う人に「健康に無関心で周囲に害を及ぼす自己中心的な存在」ないしは「常にストレスを抱えている人」とか「だらしく自制心の無い人」などのレッテルが貼られるようになりました。これは社会的スティグマです。

◎

繰り返しますが、タバコが良くない事は明らかです。私が問題にしたいのは、社会的スティグ

マが何を生むのかです。周囲からのスティグマは、タバコを悪いと知っていながら止められない人を、より意固地に身構えさせるか「どうせ自分は意志の弱いダメな人間だ」と思い込ませるかどちらになります。この後者が自己スティグマです。自己スティグマは、何も建設的なものを生まない、最悪の状況です。

◎

世の中全体として、禁煙の意識は向上しています。これはたいへん良いことです。問題は、悪でしかないものを未だに手に入る状態にしていることです。タバコのニコチンには強い依存性と嗜好性があります。軽い気持ちで手を出して、止められなくなって苦しんでいる人を禁煙外来で何人も見てきました。電子タバコは紙巻きタバコに比べて有害成分が少ない可能性はあるものの、ニコチンが含まれるため依存性という意味では変わりません。企業秘密で成分不明のモノも多いです。禁煙は、肥満治療と同じです。医療者としては、動機付けのチャンス逃さず、自分も一歩間違えると同じ境遇になっていたという思いを忘れず、できる限りのサポートをするしかありません。



【プロフィール】
（いがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とっても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又クヌクしています。

濱の起業塾 七十八 『地域経営視点①』

今から三十数年前頃だったと思う。いくつかの社会課題・地域課題解決プロジェクトに携わらせていただく中で、見え始めたことがあった。それは「地域を経営する」視点の重要性だった。

その後、ややあって某市が財政破綻をしたことから、自治体の行財政改革・財務体質の改善の脈絡で、自治体経営という概念が提唱されると、両者が混同されて語られる場面が現れ始め、非常な違和感を覚えたことを記憶している。

自治体経営は、地域経営の中の一つの領域であり、地域経営の視点の方が、より俯瞰的である。

ある地域課題・社会課題を解決しなければならぬといしよう。問題の原因は、その課題の中に存在するのではなく、「なぜその事象が課題として認識設定されるに至ったのか」の方が重要である。咳が止まらないからと医者に行くと、咳止め薬を渡されたものの、一向に改善せず、別な医者によって、別な疾患が見出されて、ギリギリ事なきを得た。というよう

な事態が地域にも起こり得る。好ましくない事象が起こった時、直接的な原因だけでなく、この奥に潜んでいるかも知れない根本的な原因・問題点も観ようとする意思・意識が、事の根本的解決の糸口を掴ませてくれる。

そんなときに、持ち合わせておきたい視点が「地域を経営する」というものではないかと考えている。

地域経済の基本的な構造は、どうなっているのか。ベッドタウン経済なのか、産業立地型なのか。歴史的な地域である場合、地域の基幹産業はどのように変遷していき、現在はどうなっているのか、それらを支える交通・流通は…、など着目すべき点は多い。

その一方で、地域の伝統文化・暗黙の指向性は、どのようなもので、なぜそれらが形成され、今日まで継承されているのか、といった面の観察も欠かせない。

産業・経済面の分析は、政府機関に専用サイトがあり、容易に活用できる様になったのは有り難いが、こちらの面は、暗黙であるが故に地元の方々と接する時間がある程度以上持たなければ、察することさえ難しい。であるがゆえに、面白いとも言えよう。

バレーボールSVリーグ女子の「アランマーレ山形」は、9月中旬に運営会社のプレスステージ・インターナショナル、本拠地を山形県酒田市から秋田市に移すことにした。地元紙によると、2030年以降リーグのライセンス交付を受けるには、5,000人以上を収容可能なアリーナでホーム戦の8割以上を行うことが要件の一つとなっている。

山形県内には基準を満たすアリーナがなく、酒田市が新アリーナ整備を検討してきたが、資金調達が困難として2024年2月に断念し、アランマーレ山形は2028年秋に新県立体育館（秋田市、6,030席）が完成する秋田市の関係機関と協議し移転を決めたのだという。秋田市中心部に位置する秋田県立体育館は、B1リーグの「秋田ノーザンハピネッツ」の本拠地も兼ね整備するもの。秋田県（市もか）は、バスケット熱が割と高いため、各種観客数の基準をクリアした結果、現在の県営体育館を建て替えることとなった。この酒田市のバレーボールチームの秋田移転について、地元紙は歓迎と期待ばかりの声を載せており、今後の問題は一切記載していない。

そもそも何のための規定、誰が決めるのか。バレーボール協会のような組織なのか。勝手に基準を設定し、それを満たさないと除名とか全くJリーグと同じ構図でないか。

秋田市では、サッカーJ2「ブラウブリッツ秋田」の本拠地スタジアム問題で、何年も揺れ続けており、前回の市長選挙の最重要とも言える争点にもなった。観客動員数は増加してきているが、Jリーグの定めた規定には達していない。また、来季からサッカーは、春から秋の1シーズンから、欧州に合わせ秋から春の1シーズンに移行する。寒冷地に配慮するとはしているが何をどうするのか。記憶が定かではないが、J2の公式戦が12月の秋田市で開催されたことがあったが。

冬に寒冷地で屋外競技を実施すべきではないと思う。選手のみならず、観戦する観客も雪のちらつく2時間くらいスタンドで応援しているのである。因みにプロ野球で仙台市の「東北楽天ゴールデンイーグルス」は、3月のオープン戦は静岡に拠点を置きミニキャンプや試合を行っている。春先4月でのナイター（公式戦）はまだ寒いので、平日でも昼に開催している（秋田市、仙台市とも寒冷地としては降雪が少ない地域であるが）。

いま、秋田市周辺に本拠地を置くプロスポーツは、バスケット男子・女子、サッカーである。それぞれ観客動員数に基準が設定されているが、秋田市の人口は約29万人、秋田県は9月発表の統計によると88万人を割った（仙台市よりも約20万人少ない）。

筆者はスポーツ観戦が好きであるし地方での活動の役割も賛同しているおり、地方でのプロスポーツを否定するものではないが、運営していけるのか。どのスポーツもそうであるが、大都市圏と地方圏は人口や経済規模が違いすぎ、同じ土俵でモノを語るべきではないのでないか。勢いとか、子どもたちへの夢を与えるためとか枕詞をつけるが、結局、赤字の補填に行政や経済団体の支援という形にならないか危惧するところである。

当施設（現 有田川町移住就業支援拠点施設）を計画していくなかで足りていなかったもの…それは、女性の目線や意見です。そして、現に宿泊・滞在施設を運営している経験値です。そう。当たり前のことができていなかったんですよ。外部のいろんな目線を入れず「こんな感じでいいでしょ？」みたいな施設整備をしてしまうと、いざ開業の段階になって「運営側のことを全然考えてくれない!」「なぜ、ここにこれ?」と苦情が出ることうけあいです。

さて、そんな適任者探しって苦労しそうなものですが、幸いにもすぐに候補者が見つかりました。濱さんをはじめマネージャーのお二人には、仕事でお泊りいただく際、数少ない地域内の宿の中でも面白いオーナーさんがいるところをご紹介していました。「部屋は快適?」「Wi-Fi飛んでる?」というのも大事なのですが、地域のことをよく知るオーナーさんとの生の会話も大切。そんな宿の一つが、ゲストハウスもらいもん&日日でした。しかも、女性オーナー。しかも、まちづくりに興味ありあり。こんな適任者、そうそういません。…ただし、彼女が愛知県から有田川町にUターンする際、私とは遺憾(?)があったことも今では弊社のネタの一つです（その件についてお知りになりたい方は、ぜひこちらまでお越しくださいwww）。そんな彼女がこの検討チームに合流することで、整備計画や設計に細やかな視点と運営に向けた勢いが加速していきました。

そして、当事業3年目となる2022年、有田川町役場や議会のみなさんのご支援もいただき建設工事に着手。地域事業者側も運営法人設立に向けた検討を重ね、同年9月、なんと代表理事の職にはその彼女・楠部が就くかたちで弊社設立の運びとなりました（これも濱さんが仕掛けた罠?）。それと時を同じくして、私自身の私生活にも転換点が訪れます。もう少し先かなと思っていた、両親の介護が現実の課題となってきたのです。しかも、当事業だけでなく、併行して取り組んでいた農林水産省の補助事業もこの年が最終年度。翌春には当施設が完成、開業。離れて暮らす実家・両親を優先しながら、運営法人のサポートにも回れる。そんな思いと状況のなか、残り5年を残して早期退職する決断をしました。

…そう。以前から感じていた、濱さんの無言の圧力（アスリックニュース2025年7月号参照）が現実のものとなってきたのです（笑）

※ゲストハウスもらいもん <https://moraimon.jp>



『相模の国から ～大魔神のたび～ 』 エンジン01文化戦略会議に参加して
茨城県境町 参与 溝口 久

先の9月5日から7日まで、石川県加賀市で開催された「エンジン01文化戦略会議」に参加した。文化人が集まり、社会や地域について語り合うこの会議は、2001年に始まり、すでに25年の歴史を刻もうとしている。私が初めて参加したのは2004年豊橋市での会だった。その後、2012年の浜松市、そして甲府市、市原市と続き、今回が5度目の参加となる。

今年の会場は山代温泉の「加賀百万石」。これまで見た旅館で最大だ。多数の客室、宴会場、コンベンション機能を持つ。団体旅行が主流だったところは毎日が「祭り」モードだったんじゃないかと思う。

9月5日13時からのオープニングに間に合うよう、小田原から米原で新幹線乗り継いだ。敦賀からは、開業したばかりの北陸新幹線に初めて乗る。加賀温泉駅に着くと、その広さに驚いた。中国で見かけるような巨大な駅舎まではいかないが、世界を対象とした駅であることに違いない。

オープニングシンポジウムのテーマは「どうする日本 混迷する世界の中で」。田原総一郎、津田大介、夏野剛、三浦瑠麗、和田秀樹といった顔ぶれが登壇した。91歳になる田原氏の暴走ぶりに場は盛り上がった。日頃文化人に触れることのない私にとって知らない人ばかりだったが、手元にあるガイドブックでプロフィールを確認して聴き入った。登壇者は皆私より歳下、学ぶことは多い。普段も若者との接触を多くするようにしている。続いて「百万石の歴史と能登の復興」では、実行委員長の辰巳琢郎、歴史学者の磯田道史、そして石川県知事が登壇。加賀百万石の範囲って金沢のみと思っていたら富山まで含めて何ですね。徳川との付き合い方への巧みさ、文化度を高めていった歴史を知ることになった。北大路魯山人が活躍したこの地域の料理、陶芸、漆高工、絵画、書、建築いずれも特筆するものがある。私が敬愛する由布院の中谷健太郎さんの叔父中谷宇吉郎は片山津温泉出身だし、加賀の地から別府そして由布院に流れてきたルーツを持つから、今の由布院の姿があるのも加賀のおかげかな。

翌日は13の教室に分かれ、各講座が1時間15分の時間割で進められた。私はまず「加賀・石川の建築巡り」を聴講。建築家・竹山聖氏の話は、人の往来が生み出す都市の必然性について触れ、ギリシャ都市にまで遡るスケール感で語られ、強く印象に残った。二つ目の講座は「戦後80年 メディアが伝えない日本の危機」。三つ目は「生成AIを地方創生にどう活かせる

か」。後者では、地方振興というよりもAIとの向き合い方そのものが語られ、考えさせられる時間だった。

そして何より楽しみにしていたのが「夜学」と呼ばれる夜の会食プログラムだ。今年は22もの会が用意されていた。その中から私が選んだのは山代温泉の名旅館「あらや滔々庵(とうとうあん)」での会。ゲストは漫画家・東村アキコさん。実は当初、彼女のことを知らなかったのだが、代表作『かくかくしかじか』が映画化されていると知り、事前に作品を読み込んで臨んだ。会費は2万5千円、参加者は10名。自己紹介を交えつつ、アキコさんのユーモアにあふれた話で場は大いに盛り上がり、和やかで親密なタベとなった。何とラインも交換し、小田原の我が家にも遊びに来られるとの勢いであつた。さて、実現するか？

最終日は「まちなか講座」。加賀市内各所に散らばる会場で講座が開かれる。私は九谷焼美術館を訪れ、「大聖寺十万石の歴史と九谷焼」というテーマを聴講した。九谷焼を理解するいい機会となった。この場にも東村アキコさんがゲストとして参加されており、終始和服での参加で、加賀百万石の文化にマッチしていた。

エンジン01は、知的刺激と人との交流が濃縮された場である。今回も大いに学び、笑い、考える時間を過ごせた。来年はどこで開催されるのか。まだ発表はないが、大いに楽しみにしている。

